

健康のしおり

皆さんの健康のお役に立つように、このようなパンフレットをつくりました。
是非ご覧下さい。

港 南 区 医 師 会

横浜市港南区港南中央通7-29

電話842-8806

港南区医師会休日急患診療所

診 療 日 日・祭・年末年始

診療時間 午前10時～午後4時まで

電 話 842-8806

と ころ 鎌倉街道 バス停 吉原
横浜市港南スポーツセンター前

ピロリ菌と萎縮性胃炎

ピロリ菌という細菌の名前をどこかで聞いたことのある方も多いと思われます。正式にはヘリコバクター・ピロリと言って、胃の中に感染する強酸性の環境でも死滅しない病原菌です。胃の出口、幽門（ピロルス）の近くに生息して、ヘリコプターのような形のべん毛を持っているので、このような名前が付けられました。

欧米ではあまりみられないようですが、東アジアに感染者が多く、日本人の約70%は胃の中にピロリ菌が感染しているのが現状です。現代の国民病とも言える感染症ですが、かつて日本人に胃癌が多かったのはこのピロリ菌の感染率が高かったからではないか、とも言われています。

このピロリ菌、多くの場合5～6歳までの幼少期に親から子供へ感染が成立します。親の口につけた箸やスプーンで子供に食べ物を与えたり、大皿料理や鍋を各々の箸でつつき合ったり、という食習慣が主な原因と言われています。また井戸水から感染することも多く、生まれ育った家に井戸があった方は要注意です。

このピロリ菌が、何十年かの長い時間をかけて慢性萎縮性胃炎という状態を引き起こします。この萎縮性胃炎、以前は加齢による粘膜の変化と考えられていましたが、実はピロリ菌が原因であることが多いことが判りました。強酸性の環境で生きていくために、ピロリ菌はアルカリ性物質のアンモニアを産生して、自分の周りの胃酸を中和しながら生息しています。このアンモニアの刺激によって胃粘膜がじわりじわりと傷つき、萎縮性の変化をしていきます。

慢性萎縮性胃炎が本格的になると、自覚症状として食後の胃もたれや腹部の膨満感が起きやすくなり、胃・十二指腸潰瘍も発生しやすくなります。

そして最大の問題は、胃癌が発生しやすいという

こと。逆に胃癌の周囲の粘膜は、萎縮性胃炎の状態です。100%すべてではないですが、かなりの高い確率で胃癌の原因は萎縮性胃炎から起こる粘膜変化であることが判っています。

ピロリ菌が胃の中にいるかどうかや、萎縮性胃炎を起こしているかどうかの診断には、血液や尿の中の抗体を調べる方法や、便の中に菌が出ていないかどうか確かめる方法もありますが、内視鏡検査が一番確実な方法です。ピロリ菌の存在を確かめると同時に、胃粘膜の状態も画像で直接確認できるからです。

もしピロリ菌が陽性の場合、菌を退治する除菌療法をお薦めしています。3種類の内服薬を1週間集中的に服用するという比較的簡単な方法で、成功率は70～80%と言われています。除菌が成功すれば、すぐにではありませんが数年かけて徐々に胃の粘膜は正常化していきます。

実はこの除菌療法、以前は明らかな胃・十二指腸の潰瘍を合併していることが健康保険適応の条件でした。潰瘍がなく萎縮性胃炎だけの場合は、保険診療が行えず自費診療で決められていました。その不合理を消化器医達が数年かけて政府に主張した結果、ようやく今年の春よりピロリ菌の感染が確認できていれば、潰瘍を合併していなくても除菌療法を健康保険で行うことができるようになりました。ただし内視鏡検査を行って確認するということが必要条件です。

現在徐々に感染者数は減ってきていますが、検査件数の拡大・除菌療法の普及でますます萎縮性胃炎、ひいては胃癌の発生率は減っていくことでしょう。

胃もたれ・食後のお腹の張りを感じていて、まだ胃の精密検査を受けていない方は、ぜひ消化器内視鏡の専門医にご相談ください。